

【札幌】道がまとめた2016年度の新規就農者実態調査によると、道内の新規就農者は566人で前年に比べて23人減少、2年連続で600人を割り込んだ。就農が最も多かったのは十勝で、前年に比べて9人増の93人だった。

全道は23人減566人

新規就農者のうち新規学卒者は181人、Uターン就農者は268人、新規参入者は117人（うち農家出身27人）だった。

前年3位だった十勝は上川（86人）、空知（82人）を抜いてトップに躍り出た。内訳は新規学卒は39人（前年比2人減）、Uターン就農は42人（同8人増）、新規参入は12人（同3人増）。

道内全体の経営形態別では、畑作が171人、稲作が142人、酪農が131人の順。新規参入は野菜54人、酪農30人、畑作15人だった。

新規参入者の初期投資は500万円以下が3割弱を占めており、道によると、初期投資が少なくて済むトマトなどのハウス野菜への新規参入が増加傾向にあるという。

畑作や稲作は農家出身者による就農が主体だった。

12年に始まった青年就農給付金制度の活用などによって新規参入者はここ数年、年120人程度で推移している。

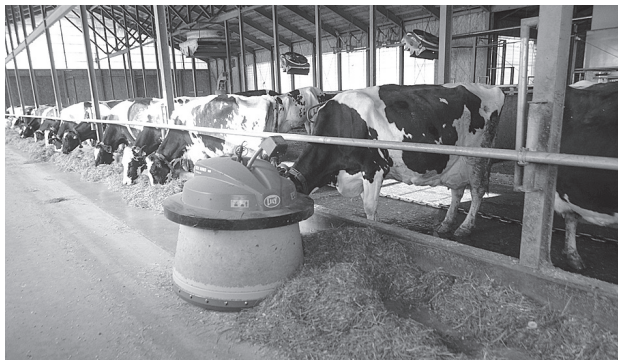
給付金は最長5年間、最大150万円の給付（所得制限あり）が受けられる制度。16年は準備型で225人、経営開始型で604人が受給し、このうち農家出身ではない割合は準備型、経営開始型ともに約7割に達した。親とは別経営で独立・自営する農家出身の新規参入者も増えているという。

農業後継者となる新規学卒者やUターン就農者の割合は全体の8割を占める。新規参入者は増えているものの、2年連続600人を割り込んだ背景には後継者不足が挙げられる。道は「農業高校など後継者に就農喚起する取り組みを強化していきたい」としている。

人手不足サバイバル

2018年2月3日

突破口（4） 自動化技術 ロボット導く「無人農業」



ロボット牛舎では「餌寄せ装置」が定期的に巡回。重労働が当たり前だった酪農の現場を変えつつある（加藤聖壘さんが経営する帯広市の十勝加藤牧場）

牛舎内の作業をほぼ自動化した「ロボット牛舎」が十勝管内で増えている。

酪農家にとって一番手間がかかるのが搾乳だが、ここでは搾乳機の前に牛が次々と立ち止まる。近くに自動給餌機があり、牛が餌を食べる間にセンサーが乳房を認識。専用アームを自動で取り付け搾り始める。

作業は1日4時間

内部を巡回する別のロボットは、牛が食い散らかした餌を再び食べられるように寄せていく。ふん尿掃除や換気も自動。酪農家がやることといえば、朝夕の寝床の清掃、餌の混合、搾乳機の保守点検くらいだ。

「1人が1日4時間くらい作業すれば十分」。ロボット牛舎を4年前に導入した帯広市の加藤聖壘（まさはる）さん（39）は話す。以前は、4人がかりでも8時間はかかったという。

しかも、搾乳機は約80頭の牛それぞれの搾乳履歴を基に適切なタイミングで搾っていく。これまでは経験や勘に頼っていた部分だ。ロボット牛舎の導入に2億円近くかかったが、加藤さんは「人手不足の影響で酪農ヘルパーの時給は上がっている。自動化に投資した方が結果的に安く済むのではないかと指摘する。

十勝を支える農業は、他の産業に先駆けて人手不足の克服に取り組んできた。管内の農業就業人口は2015年で1万6400人。10年間で約4000人も減ったが、最先端の自動化技術を次々と導入し、生産性はむしろ高まった。昨年、管内JA取扱高で3388億円と過去最高額を塗り替えたのは記憶に新しい。

◇

畑作も自動化が加速する。GPS（全地球測位システム）を活用したトラクターの自動操舵（そうだ）だ。

凹凸がある畑でトラクターを真つすぐ走らせるのは想像以上に難しい。習得には4～5年かかるとされ、体力と集中力も必要。自動操舵なら、人工衛星が発するGPS情報を基に自動走行する。人間のハンドル操作は、畑